

三原市遺族会

三原市遺族会あゆみの概況

三原市は、往古の昔から幾多の歴史の変遷を経て、明治、大正時代に入り、昭和十一年十一月、二町四村で合併し三原市が誕生し、工業都市三原市として出発しました。

戦後も備後工特地域としての指定を受け一段と目覚ましい発展を期待されるなかで、商工業都市として大きく飛躍し、昭和二十六年以降昭和三十三年までに隣接の一町八村と編入合併し今日では、国際化時代に対応できる陸海空の結節した西日本の高速交通体系の要衝として新たな躍進を続けています。

三原市遺族会戦後の足跡も、市勢の進展と表裏一体で、何時の時代も市当局の物心両面にわたる理解あるご指導援助で今日では県下でも内外ともに充実した屈指の遺族会として活気のある運動を推進しております。特に、戦後歴代市長は、英霊顕彰の崇敬心が厚く名誉会長として実に四十二回にわたり三原市主催の追悼式を挙行されています。このことは三原市遺族会の名誉であり全国に冠たるものと自負しております。又、活動面では青壮年部の事業展開で、後継者養成、組織強化のため登録部員数の倍加運動に婦人部の全面的協力を得て逐年困難を克服して果敢に取り組み、恩給需給者担当数の部員を確保する等々、絶えず上級団体の意図を体しての実践活動は特筆大書に値します。以下、当会

の現状の一端を紹介します。

記（員数、会費、顕彰、研修、巡拝、その他）

- ① 会の創設、昭和二十五年四月十三支部（平成七年一月二十三支部）
- ② 英霊柱数二三四〇柱、遺族数、特別会員三四〇名、一般会員一三三〇名、婦人部数二九〇名、青壮年部員数二三〇名、県会員数三二〇名
- ③ 活動、会費徴収は年一回、特別会員二五〇〇円、一般会員五〇〇円、三原市補助金一八六〇〇円
- ④ 英霊顕彰について、三原市主催の追悼式、年一回毎年五月、三原市遺族会主催の慰霊祭、年一回支部主催の慰霊祭四カ所、靖国神社団参、以前は毎年、最近は三年目毎に実施、市内に所在する忠魂碑、慰霊塔巡拝を隔年実施。
- ⑤ 三原市の幹部、福祉関係の団体長を囲む座談会、健康保持のため市内の知名氏を招いて勉強会、地区懇談会等を屢々実施して自己啓発のための研修を行い本会の目的達成のためつとめている。
- ⑥ 市内の忠魂碑数七碑、慰霊碑一碑、招魂社一社あり、年一回遺族会の指導で美化作業を実施する。盆、春秋の清掃は各支部で行う。
- ⑦ 遺族会の機構図及び役委員、本部役員一七名、支部長二三名、副支部長二六名、顧問、参与五名、本会継承を目的に婦人部・青壮年部も本会と同じ組織を作っている。遺族会の目的達成のため渾然一体となり行事の執行にあたっている。
- ⑧ 戦没者遺族相談員の委嘱（厚生大臣）
昭和五年十月一日～四八年九月三十日 松山新次郎
昭五一年十月一日～五四四年九月三十日 高下 源吉

昭五四年十月一日～現在まで

汲田寿杜子

■三原市遺族会の機構

鷺浦支部 八幡支部 小泉支部
幸崎支部 沼田西支部 沼田東支部
須波西支部 須波支部 田野浦支部
高坂支部 長谷支部 宮浦支部
南部支部 西野支部 西部支部
臨港支部 本町支部 深支部
中之町支部 東部支部 糸崎西支部
糸崎東支部 木原支部
婦人部、青壮年部

歴代の役員

年度	会長	副会長	会計	婦人部長
昭和二五年	秦 静雄	奈良原半兵衛		竹下 ミキ
昭和二八年		井本彦太郎		
昭和二九年	秦 静雄	渡辺 禎吉		竹下 ミキ
昭和三十一年		瀬戸本慶太郎		
		吉名芳太郎		
昭和三二年	渡辺 禎吉	瀬戸本慶太郎	藤本キクノ	竹下 ミキ
昭和三六年		吉名芳太郎		
		森保美喜男		
昭和三七七	渡辺 禎吉	瀬戸本慶太郎		木戸 正市
昭和四四年		吉名芳太郎		竹下 ミキ
昭和四五年	渡辺 禎吉	瀬戸本慶太郎		大戸 正市
昭和四六年		吉名芳太郎		竹下 ミキ
昭和四七年	渡辺 禎吉	瀬戸本慶太郎		金光 幸枝
昭和五十年		吉名芳太郎		川西 雪代
昭和五一年	吉名芳太郎	浦谷 清司		金光 幸枝
昭和五四年		坂田 正子		奈良原喜代子
昭和五五年	吉名芳太郎	浦谷 清司		小池 伸子
昭和五八年		松山新次郎		金光 幸枝
昭和五九年	吉名芳太郎	浦谷 清司	山田 正	谷原 圭子
昭和六十年		松山新次郎		
昭和六一年	浦谷 清司	奈良原喜代子		桑木きくえ
昭和六二年		吉池 賢之		谷原 圭子
		奈良原喜代子		
		平本 久良		
昭和六三年	浦谷 清司	吉池 賢之	上野 章	神原ヨシ子
		平本 久良		
		谷原 圭子		

平成 元年 浦谷 清司 吉池 賢之 中谷 義雄 高下 幸子

昭和三八年

なる。

平成 二年 浦谷 清司 吉池 賢之 中谷 義雄 平本千代子

三年

昭和四一年

◎文化会館竣工にともない、十三回追悼式、

平本 久良

谷原 圭子

藤井 康範

平成 四年 浦谷 清司 平本 久良 下山根義行 小池 伸子

昭和四五年 浦谷 清司

七年

只佐 盛夫

昭和四八年 新川 清彦

谷原 圭子

◎青年部登録制度発足十五名登録初代部長に、浦谷清司就任。遺児台帳を作成する。

藤井 康範

◎三原市遺族会主催による靖国神社団参を実施し、会員七十名参加三年目毎に団参を行う。

遺族会行事のうつりかわりと青年部のあゆみ

年 度 青年部長

主 な で き ご と

昭和二五年

◎四月一日三原市遺族会設立、会員数二八一名支部組織は十三であった。慰霊祭は遺族会主催で仏式で施行する。(毎年)

昭和二九年

この年総会で会則の承認を得施行される。
◎隣接の長谷、八幡、沼田東、沼田西、小泉の各町村との合併により支部数十八支部となる。

昭和三一年

◎高坂、鷺浦、幸崎の各町村の合併により五月一日現在二十一支部会員数一七六四名と

昭和四九年 浦谷 清司

五十年 平岡 英一

昭和五一年 中岡 洋二

五二年 平岡 英一

藤井 康範

昭和五三年 藤井 康範

六二年 中岡 洋二

平岡 英一

◎登録部員数三十名から四七名に増員する。

◎三月青年部組織拡大のために遺児台帳により遺児全員に呼びかけた結果一五三名になり、青年部員名簿を作成し組織造りに取り組む。

◎六十一年春の褒章で会長浦谷清司公共福祉活動で藍綬褒章を受賞。

◎十二月英霊にこたえる会加入促進運動展
開、入会申し込み者数六一〇名。

昭和五四年
◎三月二十日沖繩慰霊巡拝会長他七三名内青
年部七名参加ひろしまの塔の前で慰霊祭を
挙行。

昭和五五年
◎二月広島県遺族会青年部の第十一回統一集
会を三原市で開催し昼食時に三原やっさ踊
りを披露し出席者より好評を得た。

昭和五六年
◎青年部の組織強化を図る為親会の支部単位
で地区懇談会を開催し役員を決定する十支
部。

昭和五七年
◎この年度より青年部の名称を青壮年部に
変更、登録部員数も毎年増加して一八四名に
なる。

◎五月の慰霊祭に青壮年部の発案で搭婆供養
を開始し好評を得、以降毎年実施し現在に
至る。

昭和五八年
◎五月、名誉会長、顧問、参与制を置く。

◎三月市内宗光寺に安置してあった戦没者遺
骨箱を六〇〇柱の内三〇〇柱を関係遺族に
返す。

昭和五九年
◎十月青壮年部地区懇談会を終了し支部組織
を完結する。登録部員数も二二四名になる。

昭和六十年
◎婦人部で戦争体験記を子孫に残したいと資

料集めに取り組む。青壮年部もお手伝いを
する。

昭和六一年
藤井 康範
昭和六二年
中岡 洋二

◎婦人部で集めた戦争体験記の編集に取り組
む。

平岡 英一
神原 康子

◎八月婦人部で編集した戦争体験記の題名
を、「征きて還らず」と決めて題字を板垣
正参議院員に書いて貰い製本発行し、福祉
会館で発刊記念式典を三原市長も出席され
て盛大に開催する。

昭和六三年
平岡 英一
中岡 洋二

◎六月市内に所在する忠魂碑七カ所をバス三
台で巡拝する。

平成元年
中原 賢壮
平原 美徳

◎前年の残り五カ所をバス三台で巡拝する。
◎十月青壮年部で母に対する感謝大会を行な
う。

平成二年
◎中国残留孤児支援金募金に取り組む。

◎四月三原市福祉事務所福祉係が掌理してい
た三原市遺族会に関する事務を引継ぎ執行
する事になり事務局体制を整え藤井副会長
が庶務を担当する。

平成三年
◎青壮年部規約作成。遺児名簿作成に取り組
む。

平成四年
藤井 康範
田村 宗幸

◎四月浦谷清司会長が広島県遺族会会長に就
任。

池本 朋哉
◎七月支部長会議において、三原市遺族会の



第2回三原市遺族会主催慰霊祭
(昭38・5・12 於浮城会館)

第30回遺族会主催慰霊祭
(昭57. 5. 16 於文化会館)



第15回三原市主催追悼式
(昭41. 4. 20 於三原市文化会館)

第41回遺族会主催慰霊祭
青壮年部による搭婆供養
(平5. 5. 16 於文化会館)



平原 美徳

継承と英霊顕彰、遺族会活動を二十一世紀へ伝えるため基金の積立てを計画し趣意書を配布要請する青壮年部は部員の意識向上を図るため資料と遺児名簿を作成して地区懇談会を復活。

平成 五年

◎十月広島護国神社団参と観劇。

◎十一月六日、三代会長顧問吉名芳太郎逝去。

平成 六年

藤井 康範

◎七月善昌寺に安置してあった戦没者の遺骨

田村 宗幸

箱・遺品箱三百霊の再調査内百十七霊を関

池本 朋哉

係遺族に返す。

平原 美徳

◎十一月三日、(文化の日)秋の叙勲で会長

浦谷清司勲四等瑞宝章受章。

◎十二月、支那事変、大東亜戦争戦没者の遺

骨・遺品の内百八十三霊(箱)について市

との交渉の結果奉安箇所として三原市無縁

墓地納骨室に収納の指定をうけたので埋葬

名簿を調整添付の上六年度内に納骨する。

◎十二月三十日、初代会長顧問、秦静雄逝去。

平成 七年

◎三月末三原市遺族会基金募金の作業を完結する。

遺族ら八〇〇人、めい福祈る

三原市主催の戦没者追悼式

青壮年女性部員四十名奉仕

日時 平成六年五月十五日

主催 三原市長 山本清治



奉仕する女性部員(青壮年部)

遺族の多くは高齢化しており数珠を手に祈っていた。山本市長は「市が着実に発展して来たのも、戦没者のもたらした平和の礎のおかげ、深い悲しみを乗り越え世界の平和と郷土の繁栄を誓います」と追悼の言葉を述べた。

遺族代表は次々と祭壇に向って献花した。追悼式に続いて、市遺族会(浦谷清司

会長）主催による仏式の戦没者慰霊祭が、市内三十三箇所寺院により厳修された。

体験記

三原市青壮年部 国 貞 正 治

今私が思い出すことは、つらかったことくやしかったことばかりであります。昭和十年、私は一農家の長男として生まれました。祖父、両親、妹と五人家族でありました。あれは十八年の五月だと思えます。父に召集令状がきました。父が出征した時母のおなかには子どもがおりました。体調が悪いので産婆さんに見てもらおうと、おなかの子供が死んでいるので早く病院へ行きなさいと言われたそうです。しかしその頃祖父が病気で床についていたので母は病院に行くことができませんでした。十九年八月について祖父は亡くなりました。間もなく母は病院へ入院しましたが出血多量で祖父の後あとをおうように十日後なくなりました。

葬儀の後、親族会議が開られました。今後の事について相談され、私は近くの叔母の家に、妹は遠い母の里にあずかってもらうことになりました。急に生活環境が変わったことは、私にはすぐつらいことで今も当時のことを忘れることができません。叔母の家族は七人で私とで八人家族になりました。村でも評判のよく仕事をする家でした。今迄、私はあまり家の仕事をしたことがなかったのになかなか仕事になれず大変つらい思いをしました。しばらくして妹も帰って来て、一緒に暮らすようになりました。母の里で毎日なので困ったそうです。当時三才位だ

ったと思います。

或日、私は妹を連れて約二キロぐらい離れた我家に帰ってみました。雨戸がしまって庭には草がぼうぼうと生えていました。だれもないので仕方なく帰りかけていると、となりのお婆さんが見つけて「ようきんさったのう」と云って草履を一足下しました。嬉しくて妹をつれて叔母の家に帰りましたが叔父にすごく怒られました。だまって行ったので心配していたのです。

従兄男が「お母さん」と呼んでいるのを聞くと胸にじんときてくやし涙が自然と出てきたものです。父より早く帰ってほしい、帰ってきたら思いきり甘えてみたいといつも心の中で思っていました。

終戦を迎えて一年後の昭和二十一年九月の或日。叔母の家で乾燥した



国貞正治家族

タバコの葉選りをしていたときのことです。親戚の叔父が手伝いに来ておられました。私が学校から帰ると「正治や一寸とおいで」と呼び止めました。そして叔父の口から「今日のう、お父さんが戦死した」と電報が来たんじゃないかと聞かれました。突然目の前が真暗になりました。あれほど待っていたのに、くやしさと悲しさで家の中をかけこむと誰もいない部屋

の片隅でなきました。

叔母の家では、長男がシベリアから引揚げて帰って来られ、早速結婚話もちあがりました。家族が多くなり過ぎるので私達は我家へ帰ることになりました。私が中学に妹が小学校へ入学する四月の始めのことでした。従兄弟の次男とそのお婆あさんと四人の生活が始まりました。

中学三年生になると進学組は模擬試験が始まりました。私も高校へ行きたくて受けていました。ところが担任の先生に呼ばれ「あなたは進学を希望されているが叔母さんに聞いたところお金が無いから行かれませんとのことだ、あきらめなさい」と言われた時は、がっくりとききました。中学を卒業すると、家の二反の田では生活ができないので、私はサラリーマンか職人になろうと思い、叔父に相談に行きました。すると「それはいけない。あんたは国貞家を守らなければならない」と言われました。仕方がないので、農業の合間に土建業や山林の仕事等、色々しましたが、私は体が小さかったせいで何をやっても苦勞しました。その上父が出征する時、余所にあずけていた田も、戦後の農地法ですぐ返してもらえませんでした。また、父は国の為に命をおとしたにもかかわらず、親と妻にだけ遺族年金が出て、親や妻でない私達子どもには、充分な補償はもらえませんでした。そのためしばらくは、苦しい生活を強いられました。父だけではなく、残された家族まで国の犠牲となったのです。戦争が作った罪は大きい。二度と戦争があってはなりません。いつまでも平和な世の中であってほしい。子供や、孫達には絶対私のような体験はさせたくありません。

苦勞の一生

三原市婦人部 故井 藤 カメヨ

昭和十三年七月七日、支那事変がはじまり八月一日に早くも夫に召集令状が来た。福山四十一連隊に入隊、八月三日にはもう朝鮮にむけて出て征き、まことにあわただしい出発でした。糸崎駅に子供を連れて見送り、汽車の窓に一生懸命に旗をふって別れたのが夫とのこの世の別れになってしまいました。私は昭和十年に須波に嫁に来て出征の時は長女が二才、それに妊娠二か月の身重でした。残された家族は舅、姑、祖母、舅の伯母、二才の夫の姪、私達母子の七人、夫は「父母と子供を頼む。」と言って戦地に向ったが、この大家族を残して征く夫の心は断腸の思いだったと思います。農業は全くの素人だったし、しばらく「お針」をして過していました。父と母が外で汗まみれの姿を見るとじっとしておれず、祖母に子供を託して一緒に畑仕事に精を出すことにしました。馴れないけど夫が帰って来るまでと自分に言いきかせて頑張りました。年が明けて、十三年三月十八日、夫のいない家で女兒を分娩しました。すぐに戦地に知らせてもらいました。折返し軍事郵便が来て「加代子」と命名してくれ、丈夫に育ててくれとかいてきました。早く写真を撮って送りたいと話していたら、それから半月もたたないのに「戦死の公報」が来ました。昭和十三年四月十六日、金州において局部貫通銃創による名誉の戦死ということでした。全く思いもかけないことでした。周囲の者が、泣いたら血がのぼる、と心配してくれましたが、産後だけにそれは悲しい思いで、赤ん坊の無心に乳をふくむ顔を見ては、涙がこぼれまし

た。子供二人を膝によせ、年寄はいるし、何も手につかない毎日だったように思います。当時は遺族は非常に丁重に扱われていまして、市長さんや県知事さんもわざわざ弔問下さって身にあまったねぎらいを受けたのですが、その時もどんなに思っても夫の死んだことは信じる気持ちになれなくて、きつと何処かに生きている、と神様に祈りつづけたものです。家に閉じこもると、どうにもならない、辛い気持ちになるので、その苦しみから逃れたいと、ただもくもくと畑仕事をやってのけました。働いている時だけが自分のたった一つの憩の時だったからです。昭和十五年に靖国神社に祀られました。父母と私達母子の五人で靖国神社へお父さんに逢いに行こうと参拝しました。はじめて参る靖国の宮は、ただおごそかで自然に頭のとれる思いでした。夜のみたま祭で飯のやしろからみたまを靖国神社に移された時の笛の音色に、夫の声を聞いた思いがしてはじめて声を出して泣きました。その時に全国から集まった、同じ境遇の妻の方と同室で一夜を語り明かしたことで私に諦めの気持ちがつきました。つらいのは自分だけではないという思いで、それから後の我が家はまるで戦場のように大変でした。農家では食えることはできるけれど、現金収入がすぐ手に入らねば、何事もむずかしい世の中でした。その後かぞえればきりのない不幸が相つぎました。おしまいにはこれが私の宿命、と諦めて過ごした半生涯だったと思います。昭和十八年三月には五才になった次女加代子の急死、風邪と診断されたのが、ジフテリアで母の眼の前で苦しみながら息をひきとった。夫が戦場から名前をつけてくれた子供を死なせてしまって、いくら悲しんでもどうにもなりません。これが戦後の私の最初の試練だったと思います。昭和十九年舅の伯母の死。昭和三十六年我が家の大火、九十三才の祖母の炬燵の不始末か

ら納屋を全焼。農家の大切な農機具一切を失い途方に迷いましたが、それよりも近所の皆様にご迷惑をかけ、気の小さい私には耐えられない重荷が又一つ。昭和三十九年一月三十日長女清美の病死。何故私はこんなに子供に縁が薄いのだろうか、今は、たった一人遺された夫の分身である清美も二十八才の若さでこの世を去った。この子がいたから私はあんなに耐えられたのに、と生きる希みを断たれた思いでした。四十二年五月祖母の病死、子供の守を引受けて授けて下さった祖母も九十九才であの世へ。昭和四十二年七月大洪水に遭う。この町でかつてない大事故で町中大騒動の中で我が家の被害が一番大きく、母屋の土台だけ残してすべて流されました。幸い家族は親類に非難していたため一命をのがれる事が出来ましたが、自分が主体になって後の始末をしながらどうして？と泣くにも泣けない状態でした。その年の十月に住めればよい、と、とりあえず家の形ができました。四十三年十月に今度は舅の死。永年家族の為に働いて、大きな支えであったのに。このような苦しみが続く中で、その後私は、現金収入を得るために市の失業対策に就労し朝晩は農業、年寄の世話、そして心の支えとして遺族会のお世話をしながら苦労の連続の中を今日まで生きてきました。いろいろありましたが、夫が戦死して来年四月で五十回忌を迎えます。私も七十四才になりましたが、私の一生は一体何だったのだろうか、という思いがしきりです。今は二才から娘と一緒に暮らした夫の姪の家族と一つ家に住み三人の孫に囲まれ、不自由なく、幸せに暮しています。この六十一年の五月に、五十年間共に過ごした姑も九十三才で私に看とられて、安らかに永眠いたしました。その母が、かめよさんありがとうのう、あんたが一番よくしてくれました。とよろこんでこの世を去りました。その一言で私の今までの苦労の

し甲斐があつたと身にしました。夫を失ない我子二人とも亡くした私は、今、仏前でみんなの冥福を祈りながら一日一日を平和に過ごしています。どうかこの平和がこわれませんように、英霊のみなさんどうかお守りくださいませ。